Monsieur Kurata

ムッシュ・クラタ

山崎豊子

新潮文庫

ムッシュ・クラタ

新潮文庫　や－5－22

平成五年八月二十五日　発行

著者　山崎豊子

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部(〇三)三二六六－五一一一
編集部(〇三)三二六六－五四四〇
振替　東京四－八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・株式会社大進堂
© Toyoko Yamasaki 1993　Printed in Japan

ISBN4-10-110422-0 C0193

新潮文庫

ムッシュ・クラタ

山崎豊子著

日本国際児童図書館
藏書
笹川良一記念文庫

新潮社版

5123
財団法人日本科学[illegible]会

目次

ムッシュ・クラタ……七
晴着……九五
へんねし……一三五
醜男……一六七

解説　権田萬治

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ムッシュ・クラタ

ムッシュ・クラタ

倉田玲氏が亡くなってから既に十年を経ていたが、倉田氏の通夜の印象は、私の記憶の底に強く残っていて、何時か、倉田氏のことを書いてみたいという思いが、私の胸にあった。倉田氏の通夜は、格別、盛大に行われたのでも、また特に変った様子のものでもなかったが、その通夜の印象が、倉田氏の人生と深く繋がっているように思えたからであった。

その日、私は遅い朝食を終えて新聞を開くと、倉田氏の訃報が、毎朝新聞の死亡欄に小さく報じられていた。型通り死亡日時と死因、葬儀の日を記したあと、倉田氏のこれまでの経歴が列挙され、毎朝新聞大阪本社の外信部長を最後に停年退職し、その年に死亡したことが記されていたが、ムッシュ・クラタという一種の皮肉を籠めた呼ばれ方をし、服装からもの云い方、仕種に至るまで、万事、フランス風の気どった紳士であった倉田氏には、そんな型にはまった月並な死亡記事は、他人ごとのように不似合であった。

私が倉田玲氏を知ったのは、私が毎朝新聞大阪本社の学芸部記者をしていた時であった。その頃、倉田氏は外信部長の要職にあり、私は入社したばかりの記者であったから、親しく言葉を交わす機会はなかったが、倉田氏の服装は、終戦後二年を経たばかりで、まだ復員服を着ている社員が見かけられる編集局の中で、異様に目だった。チャコール・グレーのダー

ク・スーツを皺一つなく着こなし、帽子と手袋をつけて出社し、仕事中は何時もパイプをくゆらしている倉田氏の姿は、きざを通り越して、困窮した終戦直後の生活を顧ないフランスかぶれと、陰口を叩かれていた。事実、女の私の眼から見ても、倉田氏の服装は、寸分の隙もなく整い、倉田氏の前に起ったただけでも、こちらの身だしなみを観察されているようでいやな思いをしたが、女性記者に対する倉田氏の態度は、外国流の礼儀正しさで応対し、些細な質問を持って行っても、きちっと椅子から起ち上って、丁寧にこと細かに答えられるのが常であった。

或る日、私と同僚の婦人記者が、何時もより早く仕事をすませて新聞社の玄関を出た時、倉田氏が、私たちの数歩前を歩いていた。何時ものようにダーク・スーツに黒い帽子をかぶり、きちっと手袋をはめ、小脇に洋書を抱えた倉田氏は、爪先の細い華奢な靴で鋪道を滑るような軽やかさで歩き、大阪駅の新聞売場で新聞を買い求めながら、ちらっと視線を横に向けた時、うしろから来た私たちと視線が合ったのだった。私と同僚の婦人記者は、たち止まって丁寧に会釈すると、倉田氏はつと、私たちの方へ歩み寄り、

「突然で失礼ですが、あなた方お二人に夕食をさし上げたいのです、ちょうど私の知っているレストランで美味しいフランス料理を食べさせる店がこの近くにありますから、およろしければ、どうぞ——」

鄭重な言葉で、食事を誘われた。困惑の気持が先にたったが、入社したばかりの若い記者

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

である私たちは、淑女に対する礼儀正しい紳士の態度で夕食の招待を受けて、辞退する言葉もなかった。

レストラン・ブーケは、梅田新道のこぢんまりした店であったが、美食家の常連だけを相手にしているらしく、十脚ばかりのテーブルと椅子が並べられ、真っ白な綿繻子のテーブル・クロスの上に、フランス語のメニューが置かれていた。テーブルに着くと倉田氏は、メニューを取って私たちの方へ示し、フランス語のように語尾が鼻にかかった倉田氏独特の発声で、

「スープとアントレは、何になさる？　それからお料理は――」

と私たちに聞いたが、私も同僚の婦人記者もフランス料理の嗜みがなかったから、お任せ致しますと応えると、倉田氏は、一瞬、興ざめるような表情をしたが、

「じゃあ、スープはコンソメ・マドリレーヌ、アントレは海老にすることにして、クラブ・ア・ラ・モルネ、肉料理は若鶏の蒸し煮のプーレ・ア・ラ・スタンリー、それから葡萄酒は、肉料理ですから、ボルドーの赤にしましょう」

と注文した。スープが運ばれて来ると、

「さあ、どうぞ、召し上れ、フランス風のマナーでは、スープは飲むものではなく、嚙むものだといわれているのですよ、飲もうとすると、つい音をたてるから、嚙むつもりにすれば、音をたてないという、フランス人一流のしゃれた表現ですが、実にうまく云ったものですね

え、パリにいる時、日本からの来客をレストランに案内して一番いやだったことは、スープを音たてて飲むことですよ、一度などは、ずるっとスープの音をたてた途端、同席していたフランス人が憤然と席を起ったことがあるのですよ」

と云いながら、倉田氏は女のようにしなやかな白い手で、スプーンを持ち、ひらりと音もなく、スープを口に運んだ。

「スープに次いで、やかましいのは、料理に合った葡萄酒を飲むことですが、ちょうど、日本の懐石料理で移り箸を嫌うのと同じ理屈で、葡萄酒で鼻と舌をすすいで、次の料理の新しい風味を楽しむというわけですよ、したがって葡萄酒の本格的な飲み方は、口のすぼまった大形の薄手の透明グラスで、まず色を楽しみ、次にグラスを掌の中でゆるやかに回転させながら鼻先へ近付けて香気を吸い込み、香りを賞でながら少量ずつすすって、口中で十分に味わってから咽喉へ通す、その時、はじめて葡萄酒のもつほんとうの味と香りを味わうことが出来るのです」

倉田氏は運ばれて来た葡萄酒を美しいグラスにそそぎ、ルビー色に揺れ輝く液体を振りかざすように眺め、ゆっくり鼻先まで近付けて香りを賞で、口中に含んだかと思うと、

「パリは変る、しかし私の憂愁の中では何も動いていない、

新しい宮殿も、足場も、石材も、古い場末町も、すべて、私の寓話となり、私の懐かしい追憶は岩よりも重い。」

不意に、憂いを帯びた声で歌い上げるように口ずさんだ。

「ボードレールの詩ですね」

私がそう云うと、倉田氏は、

「そうです、シャルル・ボードレールの詩です、彼はパリに生れ、パリを愛し、そしてパリに病みつかれて、死んで行った詩人です——」

ふうっと、言葉が跡絶え、倉田氏の眼は暗い曇りを帯びた。しかしすぐ、にこやかな表情に戻り、フランス料理の歴史を語り出した。中世、近世の貴族と富豪の食生活、フランス料理に残っている料理人の逸話、古典フランス料理のメニューなどを話しながら、倉田氏は次々に出される料理を楽しんでいたが、フランス料理の嗜みのない私と同僚の婦人記者は、せっかくの料理も咽喉に通らず、砂を嚙む思いで食事を終えた。

倉田氏と別れるなり、同僚の婦人記者は、

「何という講釈の多い晩餐会かしら、二度と倉田氏にはご馳走になりたくないわ」

吐き捨てるように云った。私も同じ思いであったが、ボードレールの詩を口ずさみ、ふと重い沈黙に落ちた倉田氏の表情は、妙に私の印象に残ったのだった。

その後間もなく、私は新聞社の激しい仕事に体を痛めて退社し、三年間のサナトリウム生活を送り、二度と倉田氏にご馳走になることはなかった。サナトリウムを出て、父が遺した家で母とひっそり暮しながら、学生時代から好きだった小説を、ぼつぼつ書きはじめている

時に、倉田氏の死亡記事を読んだのだった。

昭和二十九年の晩秋の肌寒い日の夕方、私は、倉田氏のお通夜に訪れた。阪急沿線の六甲口で降りて、駅前から六甲台までの緩い坂道をゆっくり歩きながら、私は、倉田氏の家に中世紀風の鉄飾りのついた扉とフランス窓がついているであろうことを想像し、倉田氏の遺骸を安置した部屋は、彩り彩りの花で埋まり、倉田氏が一番好きだったというドビュッシーの『イマージュ』が奏でられ、葬儀はマホガニーの棺に真紅の花環をおいた華麗な葬列――、そんな通夜と葬儀を空想したのだった。しかし、私が訪問した倉田氏の家は、六甲山を背にした小高い丘の上に五軒並んだこぢんまりとした小住宅の中の一軒であった。

薄暗い門燈に照らし出された古びた門を入ると、狭い三和土に、弔問客の履物が押し並んでいた。案内を乞うと、手伝いの人らしい中年の女性が顔を出し、奥へ案内された。座敷へ一歩、足を踏み入れた途端、私は思わず、眼を疑った。書斎兼応接間に使っていたらしいその八畳ほどの部屋の中央に、白布を顔に覆った倉田氏の遺骸が安置され、枕もとに倉田氏の夫人と令嬢らしい女性が白い顔を俯け、十人ほどの弔問客が膝を突き合せるような窮屈さで坐っている。そこには家具らしい家具も見当らず、色褪せた絨毯と、壁紙にはところどころに薄い汚点が見え、空疎なさむざむしさが漂い、生前の倉田氏を偲ばせるものといえば、書棚にぎっしりと詰っているフランス綴の書籍だけであった。私は自分の脳裡にある倉田氏の華麗な生活と、現実のそれとがあまりに相違し過ぎていることに、一種の戸惑いを覚えなが

ら、敷居際に坐ると、曾て倉田氏の下で副部長を務め、今は外信部長の要職にある小宮氏が、私の姿に気付き、

「おや、来てくれたの、さあ、お詣りしてあげろよ、ムッシュ・クラタは無神論者だから、戒名も、線香もないのだ、キリスト教の者はアーメンと云えばいいし、仏教の者は、南無阿弥陀仏と云えばいいし、拝む人の自由だよ」

そう云われて、遺骸の枕もとを見ると、通夜の席にあるべき、線香台も、白木の戒名も見られず、倉田氏が何時もくゆらしていたパイプが、ぽつんと枕もとに置かれているだけであった。

私は、仏式で倉田氏の霊を拝んだあと、弔問客に飲みものや夜食を運ぶ女性たちに混って、通夜の席に残っていた。夜が更けるにつれて、通夜の客の出入りが多くなり、遺骸を安置している書斎兼応接間の隣の六畳の座敷の襖を取りはずして、ぶっ通しにしても、なお玄関にまではみ出すほどの弔問客で、しかも、相当な知名の士の顔も見られた。大阪商工会議所会頭、国際連合協会専務理事、関西電力社長など関西財界の著名な顔が見え、次々と花環が届けられた。そうした中で、倉田氏とごく親しいつき合いをしていた人たちだけが、あとに残り、通夜の酒を飲みながら、遠慮のない想い出話になった。或る人は、生前の倉田氏を鼻持ちならぬきざな奴だと云い、或る人は、第一級のフランス的教養を身につけた紳士だと云い、また或る人は、徹底した見栄坊のニヒリストだと云い、新聞記者を中心にしたその席は、死

者に親しみを籠めながら無遠慮な銘々の想い出話に花が咲いていた。どの話も、フランス的な身だしなみと贅沢な雰囲気に包まれ、壁紙に汚点が見え、家具らしい家具も見当らない八畳の部屋に、さむざむと骸を横たえている倉田氏とは、容易に繋がりようのない華やかさに彩られていた。一体、この極端に異なった倉田氏の生活と、倉田氏の評価の内側に在るものは何だろうか、そこに、一人の人間の持つ何か思いもよらない人生の断面のようなものを垣間見ることが出来るのではないだろうか――そんな思いが、私の胸を強く横ぎったのだった。

その思いは、十年経った今も、私の記憶の底に残っていて、たまたま地味な文芸雑誌『文学圏』へ小説を書こうとした時に、倉田玲氏のことが、鮮明に思い出されたのだった。そして、その通夜の席で倉田氏を語った多くの人々の中で、最も印象深く、今もって記憶している四人の紳士の名前と顔を想い出し、それらの人々を訪ねてみようと思いたった。早速、私の意図していることをしたためた鄭重な依頼状を出した上で、取材ノートを携えて四人の紳士を訪ねた。

最初に訪問したのは、倉田氏の葬儀委員長を務め、学生時代からの親友であったという宝正造氏であった。宝氏は、大阪の老舗である宝屋洋酒問屋の経営者であった。心斎橋の北詰にある本店を訪ねると、六十過ぎとは見えぬ桜色の艶々しい顔を光らせながら、和服の着流

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com